



# ひらほく新聞

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく)山本直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

「ひらほく新聞」で検索!  
★感謝で継続13年目突入★  
<http://www.hirahoku.com/>  
☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

## 知覧が繋ぐ 志の継承

人生に迷ったら知覧に行け  
流れる雲よ

先が見えなくなったとき、壁にぶつかったとき、この場所がいつも僕を救ってくれた。→永松 対談

かつて愛する人を守るために死んでいった若者がいた。特攻隊が飛び立った場所、鹿児島、知覧

彼らが命を引替えて残した未来への想い、あなたは受け取りますか?

著者 永松茂久

流れる雲よ ←

QRコード

故郷大分で、たこ焼き屋の行商から商売を始め成功を収め、いまでは、日本一のベストセラー作家となった永松茂久さん。商売を始めてまもなく、先の見えない状況に陥って、まさに「思いつき人生に迷った」時、永松さんは、亡き祖父にいつも言われていた、『人生に迷ったら知覧に行け』という言葉思い出したという。以来、引き寄せられるように知覧に通い、毎回「自分がどう生きるか」の問いを受け取り、その大切さを発信し続けている。知覧はずっと何を語り、伝えてくれているのか。

### 「あなたは今、幸せですか?」「あなたの大切な人は今、笑っていますか?」

多くの書籍執筆の他、長年講演活動も続けてこられた永松さんですが、講演会では毎回必ず、この問いで始まり、この問いで終わります。

今年の終戦記念日、8月15日は、クラブハウスで早朝から黙祷の12時迄、おせっかい協会鹿児島支部でもある西郷どんの敬天愛人を伝え続ける南僕さんの特集、「知覧からの手紙」を拝聴。若者からの幾多の遺書を本気で読み上げる、南僕さんの心を込めた朗読は、まるで乗り移ったかの如く響き、胸深くに刻まれました。

実はこの日の高鳴る胸は収まらず、ご縁有難く、永松さんが講演会で紹介されていた特攻隊ミュージカル「流れる雲よ」をちょうどお休みが取れた18日に鑑賞、鬼気迫る本気の演技に終始とにかく圧倒され、そして号泣でした。居ても立っても、という思いで、翌々日には、祖父の眠る靖國神社を3年ぶりに玉串奉奠、記名正式参拝。本殿ではいつも以上に涙溢れ、今年には特に、何かに引き寄せられたような感じを感じました。

## 変革期、今昔

長引くコロナ禍、ロシア・ウクライナ情勢…、まさに現在のキーワードは『不安』であり、大変革期ともいえる。しかし、世の中の変革期は今だけではない。日本の先人たちも、その時代の幾多の難局を乗り越えて、今の時代の土台をつくらせてくれている。

そして、いよいよ私たちの時代だ。大きな話題のようだが、その大きな悩み、不安をずっと細かく砕いていくと、実はあなた自身の問題になる。対岸の火事のように感じることもなく、自分中心として捉えるには、一直線上に繋がって見ること。特攻のあった77年前〜今〜未来、時系列に想いを馳せると、今この瞬間の「命の意味」が変わってくる。

### 遺書の衝撃

最年少は16歳という若者たちの、初めて見る手紙の衝撃3つ。感動というより、男としてボロ負け…、悔し涙があふれた。

- ① 遺影の凜とした顔
- ② 実に達筆の筆文字
- ③ 8割が独身、多くが家族(主に母)への手紙

沖縄まで2時間半の飛行、その間、最後に何を考えたか、何を思ったのか…。

## 何のために

検閲があるため、無念の思いは決して書けない。では、本当に死にたかったのか、そんなはずは…。本当は怖いはず、本心は書けないギリギリの中で、『何のために、自分は征くのか、この命を使うのか』と考えた時、浮かんできたのは、家族であり、古里であり、その延長線上にある、愛する日本という国だったのだらうと解釈している。

戦争は否定しても、非情な状況下でのその思いは否定できない。そんな中でも大切な人のために強く生きようとした、77年前の先人の思いは、終わったことではなく、一直線上に今の自分たちに繋がっている。

### リーダーの覚悟

一人だけ年長の特攻隊員、精神教育を担当していた教官、藤井一陸軍中尉、29歳の悲話。

自分自身にも厳しくしていた藤井中尉は、教え子たちの特攻死の知らせを受けると「おまえたちだけを行かせはしない。自分も必ず行く」と常に言っていた。ついに、29歳で特攻志願。だが年齢的なこと、実戦経験がないこと、何より妻子持ちであるため、なかなか受理されない。そして…。

1994年12月15日早朝、厳寒の荒川に晴れ着を着た幼い娘二人と母親の遺体…。夫の特攻への決意、そして家族がいるためにその願いが受理されないことを知った藤井中尉の妻・福子さんは、こう書き遺した。「私達がいいたのでは後顧の憂いになり、思う存分の活躍ができないでしょうから、一足お先に待っています」

現場に駆けつけ、泣き叫ぶ藤井中尉…。妻子の死を無駄にすまいと再度血染めの血書を提出、受理された。藤井中尉の遺書には、こう書かれていた。

「冷たい12月の風吹き荒れる日、荒川の河原の露と消えた命、母とともに殉国の血に燃える父の意志を叶えるために一足先に進んだ、哀れにも悲しく、しかも笑っているかのように、喜んで母とともに消え去った命がいと嬉しい。父も近く、おまえたちの後を追っていかれるだろう。こんどはいやがらずに、父の膝のふところであつこされてねえねえしようね。それまで泣かずに待っていてください。千恵子ちゃんが泣いたらよくおもりしなさい。ではしばらくさようなら。父ちゃんは戦地で立派な手柄を立ててお土産にしてそちらに行きます。では、一子ちゃんも千恵子ちゃんもそれまで待っていてちょうだいね。」

### フォーユー精神

先人たちが、命を懸けて遺したかったもの。それは、自分のためだけでなく、大切な人のために生きるというフォーユー精神。その本気の思いを受けとり、重要なのは、自分たちがどう生きるかということ。

冒頭の永松さんの「あなたは今…」というメッセージは、現代を生きるあなたに対する問い。ミュージカルでも「今、日本はいい国ですか?」という特攻兵からのメッセージがあった。目の前の人を大切にす、笑顔にする。目の前にある仕事に一生懸命向き合う。自分のためだけではなく、大切な人のために、思い動くこと。目の前に喜んでいただければ、それは巡り巡って必ず自分に返ってくる。そして、その生き方は、一直線上に日本の未来へと繋がっていく。



# 言葉が

## 人生をつくる

その日は結構混んでいて、三つのレジに列が出来ていた。木下さんは前から三番目に並んでいた。パイトの女の子が「店内でお召し上がりですか？お持ち帰りですか？」とお客さんに聞いています。どこのハンバーガーショップでも見られる光景である。

何を食べようかと考えていた木下さん、ふと前の方が騒がしいことに気が付いた。一番前の男性の声が怒鳴り声になったからだ。どうも注文した商品の一つを入れ忘れたようだ。

男性は「何しとんねん。トロイんじゃお前。もうエエわ。」と怒りをあらわにし、商品が入った紙袋を奪い取るようにして店を出て行った。その後ろ姿に向かってバイトの女の子は「申し訳ありませんでした。すみませんでした。」と何度も頭を下げていた。一瞬にして店内に刺々しい空気が流れた。

二番目に並んでいたのは70歳ぐらいのおじいちゃんだった。バイトの女の子は今にも泣きだしそうな顔だったが、無理やりつくった笑顔で、「いらっしやいませ、こちらでお召し上がりですか？」と何もなかった

かのように接客した。

おじいちゃんは静かな声で言った。「お姉ちゃん、えらいなあ。世の中にはさっきの人みたいに自分の思い通りにならなかったら怒鳴り散らす人が居る。あの人も急いどつたんやろう。あんなこと言われてあんなの心はもうズタズタのはずや。にもかかわらず次に並んでくれるわしに笑顔で接客してくれた。わしにはあんなぐらいの孫がおる。あんな顔を見てその孫を思い出した。これから連絡を取ろうと思う。いやありがと。あ、コーヒーを一杯。」

その言葉を聞いた途端、堰を切ったようにバイトの女の子から涙があふれ出した。しばらく涙が止まらなかった。横のレジに並んでいた中年の女性が声をかけた。「あんた本当にいいお仕事してるわよ。」刺々しかった店の雰囲気が一瞬にして和らいだ。

言葉なんだなあと思っただ。何の関係もない間柄でも、たった一言で、一生忘れられない人になる。

言葉には言語としてだけではない、何かすごい力があるんだと思う。そんな言葉を発する人になりたいものである。(おわり)

※出典「みやぎぎぎ中央新聞(現・日本講演新聞) 2012年2月13日号より抜萃

## おせっかいの原点

私も神奈川支部として、正式に入会させていただいた、一般社団法人おせっかい協会。今日の前にいる相手のために自分にできることを即実行、見返り求めず、愛あるおせっかいを！と伝え続けているその会長、高橋恵さん宛てに寄せられた、おせっかい協会茨城支部として立候補されたNさんのお話を紹介します。

私が何故、おせっかい協会に立候補したのかをお話したいと思います。

今から30年前、私は乳飲み子を抱え離婚しました。当時は横浜に住んでおり、駅近くのマンションで家賃は12万円。生後3か月の乳児を育てながらの生活は、とても苦しいものでした。

このままでは、生活は難しい。茨城の実家に帰ることにしました。転出の届けをしに西区の区役所に行った時のことです。

転入に必要な所得ゼロ、非課税証明書を発行してもらった時でした。窓口の職員さんに泣きながら離婚に至る話をし、茨城の実家に戻る話をしていたら、私の隣に年配の女性がいました。

その女性が、いきなり私の手を握って……、

「貴方、大丈夫よ。頑張っ

て！私も離婚して女手一つで子供を育てて来たけど、その娘も立派に成人したの。だから貴方も大丈夫よ」っと手を握りしめ、私の手に紙を握らせました。

私は驚きました。何かメモ書きかな？と思ひ、恐る恐る手を広げると……。私の手の中には小さく折られた一万円札がありました。後を追いかけていきましたが、その女性は見当たりませんでした。見ず知らずの私に、温かい言葉をかけ、お金まで……。

私は、そのお金で粉ミルクを買わせていただきました。苦しい時でしたので、とても助かりました。

その時に私は、心に決めました。私も人に温かい言葉がけをして、愛のパワーを与えて行こうと。

そんな私でしたので、恵さんのお話を銀座の土屋シヨールームで伺った時、恵さんのお話に心から共感し、私もおせっかいを広めたいと思ひ、茨城支部の立候補をさせていただきました。

私が「小さい恵さん」になって茨城に、たくさんのおせっかい仲間を増やしていこうと思っています。恵さんとのご縁に心から感謝いたします。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(おわり)

## 治すこと時々……

もう一話、医療関係に従事されているおせっかい協会仲間、岡山支部のYさんのお話を紹介します。

先日患者さんに、言われた言葉。

「急に倒れて、目が覚めたら、片麻痺になって、体が動かなくなるといったよね。24時間中23時間ベットの上で、この先どうなるんだろーって、嫌なことばかり考えてた……」。

確かにうちの病院に入院してくる人は、大なり小なり、急に動けなくなってしまう方がほとんど。麻痺という後遺症が残る人も多し、言葉も話せなくなる人もいる。

### 治すこと時々

### 和らげることしばしば 慰めることいつも

誰の言葉か詳細は不明らしいけど、「治すことはなかなかできないが、慰めることはいつでもできる」という意味らしい。

要は、相手に対し優しい言葉をかけて、心を和やかにさせてあげることが、いつでも、誰でもできる。

別に相手に同情する必要はないし、相手もそれは望まない……。ただ、心を和ませる声か

けは、いつだってできる。入院患者さんに限らず、周りで落ち込んでいる人に対しても。

まずは半径30センチからできるおせっかいを！だから今日も私は、おせっかいだと分かっている、患者さんの心を和ませるために、恥を捨てて、変顔で笑いをとったのです(笑)

以下、関連して日本講演新聞、2021年10月25日号、惣士郎さんの講演記事より。

漢字のつくりから「看護」を細解くと、「全身全霊を込めた言葉や手による看護(手当て)によって、人のいのちが守られる」という意味が込められている。

生まれたばかりの赤ちゃんが抱かれ守られるのは「腕」「手」で、育児においても「手」はとても重要。お母さんの手からは多くの赤外線が出て、おにぎりを美味しくもするという。

手はとても不思議なエネルギーを持っていて。看護の「看」は「手」で始まり、「護」も右の「手」を意味する。「又」の漢字で終わる。これは、「手」が看護において極めて重要であることの意味であろう。

「患部に手を当てると、なぜか心地良く幸せを感じ、痛みが軽くなる」ということを、昔から人々が感じてきたからだろう。(終わり)

## 編集後記

私の父は、自身が長男で10歳の時、父親(私の祖父)が戦死。全国の戦争遺児が靖國参拝に集まった時の新潟県出身者の集合写真を見せてもらったことがある。

10歳の時、何を感じ、その後、どんな思いで生きてきたのか……。8年前、その父が亡くなった際の葬儀の場。参列者からのお話で、父は、まさにフォーユー精神の固まりだったと知り、号泣した。特に晩年30年の功績は実に素晴らしい。間違ひなく「誰かのために」が大好きだったのだ。

今を生きている、「いのち」とは、盲亀の浮木ののごとく、奇跡的につながりいただいたもの。ならばその「使命」は、つないでくれた方たちが喜んでくれることを実践すること。それが恩返しであり、恩送りだ。

77年前の特攻死が無駄死にはないとするには、今を生きる私たちが、その意思を継承すること。これから続く若者たちに、いかに伝えていけばよいのか。

すぐに実行できることがある。たったひと言でも人は救われる。笑顔にできる。愛ある言葉がけは、「心の手当て」になる。まずは半径30センチからできるおせっかいを即実行動で！